

インターネット公開許諾のない文章には墨消し処理を施しています。

二十年後恩師講筵の跡を訪ねて

川 瀬 光 順

私が故勤息僧正の講筵に侍し得たのは東都では明治三十一年の頃であらう高等學院で三經合讚の提唱を拜し、西京では明治三十三年九月から同三十六年六月まで三年間、初めの一ヶ年は百萬遍知恩寺の方丈、後の二ヶ年は鹿ヶ谷の新校舎で天台三大部を學んだ時であつたが、爾來倥傯、恩師にお會ひ申す機會もなく悲しい哉、遂に今日、の永訣となつた。

數日前のこと、鹿溪會では新年祝賀に因んで私の爲めに迎宴を開いて下さつて、其席上今度の記念號に恩師に關する思出を認めないかとのことで、私も快諾はしたが永いこと鹿ヶ谷の校舎にも寄りつかず、當地に參つてからも一度お訪ねしたいと思つてゐたことではあるし、今日は東山中學校に講演の正ついでに恩師の思出を認めやうと思つて舊専門學院、今の佛教専門學校の校苦を敲いた。幸に淺野君が居られて隅々まで案内の勞を賜つたが、あれは僧正お控の間であつた、これが教室、此板張が當時の疊で恩師は御座、我々は今の教卓なる此の机に凭てゐた、彼の邊は例の昆布湯の火鉢の位置だ、など聽講當時の有様がありくくと眼前に復活した。「法既本妙、靈由物情」「汝等所行是菩薩道、念所道品、卽摩訶衍」「佛以一音演說法、衆生隨類各得解」「皆有一乘法、無二亦無三」などの慣用句さへも追ひ次ぎ、耳底に轟くではないか。

僧正の講義振はお聲は低調平靜で決して雄辯といふ方ではなかつた。講義の内容も多くは科段と本疏の丁數で其記入に忙しくはあるが頗る單調なので聽講者も往々睡魔の強襲を撃退することが出来なかつた。併し時に或は學生の質問に應じて一朝油が乗つて來ると、旁搜索引、和漢今古萬卷の書を自家藥籠の物として縦横自在に論附され、四辯の文河妙に江海を控くの概があり、所謂の洪鐘控くを待て始めて鳴る

の風であつた。故に其響の大小も撞木の大小に由るのであつて、同窓諸君の中にも大杵大撞の人は随分巨大なる法音を聽き得た仁も多いであらうが、睡魔の撃退すらも容易に出来ないやうな小撞木には蚊程の法音も心には入らなかつた。そして私自身も思へば其の小撞木の一つであつたことを恥ぢ且つ悔ふる。私は當時科段の記入や末注の丁附を無意義の仕事だと考へて記入はしつゝも随分不満を感じてゐたのであるが、元來此の方法は比較研究と大綱の掌握とに無くてはならない遣り方であつて、當時私も眞に研究的態度を持してゐたら大に之を利用したであらう。丁附丈けで放棄するから不可なので進んで眞に研究すべきであつたと思ふ。研究に眼目を與へた此の方法は徒らに達意の美名の下に矢鱈に上之りをする淺薄な方法に出づる前に學者の必ず通過すべき關門であることを二十年以前に見抜き得なかつた自分を私は悲む。

明治三十六年七月私は専門學院を卒業すると同時に帝大に留學研究するの準備をせよとの宗命を受けたので其秋に上東したが、當時赤貧の私には運賃がないので藏書の全部は學院に預けた儘出發した。其翌春、日露戦争が起つたので軍籍に在つた私は出征の際戦死を必期して片身分けの積りで藏書の總てを諸方の知己に贈呈し

た。就中先づ勤息僧正の講筵に侍して聽講に用ゐて未註や科段を書き入れた法華玄義は後進學生諸氏の爲にもと學院に寄附し、平素座右にしてゐた書籍の中、英書類は加藤法順君等の如き英語熱心家に贈り、獨逸書は獨逸語の熱心家小林貞瑞君に贈つて置た——後の事ではあるが、私が帝大在學中歐州戰で獨逸書の輸入が杜絶した時、カントノ全集だけは同君から戻してもらふといふ都合の好い滑稽も起つた——然るに大戰小鬪十三回、砲彈雨下に黒土と化すべき私は却て碌々今に瓦全し、彼の屈強な柔道初段の鬼をも碎ぐ加藤法順君が十年以前に結核で瘡れ、小林貞瑞君其後振はず亦昨冬病死し、恩師勤息僧正も惜むべし遂に寶華臺上の人となられた。今日二十年振りに舊校舍を訪ふて見ると恩師既に逝いて警咳接するに由なきに、當時その所講を瓶瀉したまゝの法華玄義分冊二十卷が、あまり塵埃をも被らずに書庫の一隅を占めたるを見るや、轉た今昔の感に打たれ、且つ人事の豫測し難きを今更のやうに驚かざるを得ない。

(大正十一年二月二十八日)